

令和4年度運営諮問会議 議事概要

1. 日 時 令和5年1月25日（水）13時30分～15時33分

2. 会 場 宇部工業高等専門学校 大会議室（管理棟3階）

3. 出席者

○運営諮問会議委員（五十音順）7名

川 村 宗 弘 委員

篠 崎 圭 二 委員

末 永 久 大 委員

杉 下 秀 幸 委員

藤 井 一 憲 委員

三 浦 英 恒 委員

山 田 陽 一 委員

○宇部工業高等専門学校教職員 12名

山 川 昌 男 校長

内 堀 晃 彦 副校長

仙 波 伸 也 校長補佐（教務主事）

江 原 史 朗 校長補佐（学生主事）

松 野 成 悟 校長補佐（寮務主事）

前 田 輝 伸 校長補佐（事務部長）

田 川 晋 也 専攻科長

碓 智 徳 地域共同テクノセンター長

城 戸 秀 樹 機関評価室長

一 田 啓 介 キャリア支援室長

村 重 清 司 総務課長

原 建 二 学生課長

（陪席） 総務課副課長 総務係

4. 日 程

- 13 時 30 分 開 会
校長挨拶
出席者紹介（本校側は、座席表に代えることで省略）
資料の確認
議 事
一、議長選出
二、議長挨拶
三、議題
- 13 時 40 分 議題 1 ○宇部高専の教育活動等に関する総合評価
- 14 時 30 分 議題 2 ○教育改革の現状と課題
- 15 時 25 分 議長挨拶
校長謝辞
- 15 時 30 分 閉 会

5. 配付資料

- 令和 4 年度運営諮問会議開催要領
- 運営諮問会議委員名簿
- 令和 4 年度運営諮問会議座席表
- 宇部工業高等専門学校運営諮問会議規則
- 議題 資料 1：宇部高専の教育活動等に関する総合評価
資料 2：教育改革の現状と課題
- 令和 4 年度宇部工業高等専門学校学校要覧
- 令和 4 年度宇部高専学校案内
- 令和 4 年度宇部工業高等専門学校年度計画
- 令和 4 年 1 月～令和 4 年 12 月 宇部工業高等専門学校の動き
- その他
学校だより（104 号 2022 年 12 月）
地域共同テクノセンター News&Reports 第 33 号（2021 年度事業報告書）

(1) 開 会

総務課長の進行により、運営諮問会議が開会された。

(2) 校長挨拶

本日は、非常に厳しい寒さの中、また足元も悪い中、わざわざ本校にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

また、委員の皆様方には日頃より本校の教育研究活動、その他の活動も含めて、御理解をいただいております。また、大変な御支援をいただいておりますことに、重ねて感謝を申し上げたいと思います。

昨年は、既に皆様御案内のとおり、高専創設、高専の制度ができてから60周年に当たります。そして、本校はその1期校であり、その12の高専の一つでございます。昨年10月に記念式典を開催させていただきました。コロナの関係もございますので、学生の参加ができなかったことは非常に残念ではございましたけれども、それでも御来賓の方々、それからOBの方々をはじめ、多くの皆様にお祝いをいただきまして、誠にありがとうございました。特に、OBの皆さんは、非常に満足して喜んでおられましたので、そのことが何より良かったかなと感じております。

同時に、私ども教職員としまして、本校の伝統の重さ、そして地域の皆様、OBの皆様が学校のことを非常によく思っていて、期待をしていただいているということをひしひしと感じることができました。その思いを受けて、我々も改めて精進をして、努力していこうと考えております。引き続き、御支援をいただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

本日の運営諮問会議では、2つの大きな事柄について御審議をいただきたいと考えております。

1つ目は、例年御審議をいただいておりますけれども、毎年行っております自己点検評価、本校の教育活動に対する評価についてです。

2点目は、今年は第4期中期計画の最終年に当たりまして、1年後の来年の4月から第5期中期計画が始まります。それに向けて、これまでやってきた教育改革の中身についての見直しあるいは様々な課題が出てきておりますので、その解決に向けて準備を進めているところです。このことを踏まえ、今回は、教育改革の現状と課題という議題で、皆様方の御意見を頂きたいと考えております。2時間ほどの会議になります。長い会議でございますけれども、どうぞよろしくお願い申し上げます。



(3) 出席者紹介、資料の確認

総務課長から、本日出席の運営諮問会議委員と本校教職員が紹介された。
引き続き、配付資料の確認が行われた。

(4) 議長の選出

総務課長の進行により、本会議の議長として山田委員が選出された。

(5) 議長挨拶

ただいま本運営諮問会議の議長を仰せつかりました、山口大学工学部の山田と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

先ほど校長先生の御挨拶の中にもありましたが、高専機構、宇部高専様はじめ、今年で創立60周年を迎えられたと、誠におめでとうございます。

昨年の夏頃、朝日新聞の紙面に高専の特集記事が載っていきまして、そこで「KOSEN 高専60年後の覚醒」というタイトルがついて、高専のことをいろいろ御紹介されていた記事を私も拝見いたしました。その中で、今、高専という日本独特の教育システムが世界から注目されているという記事がございました。



KOSENというのは、これは高専機構が商標登録をされており、もう国際語として世界で通用する言葉になっているという紹介がございました。

特に今、東南アジアのほうから、この高専の教育システム、中学を卒業して5年一貫教育で、もう大学工学部と同レベルの人材育成ができるという、即戦力の人材を輩出する教育システムであるということで、東南アジアのほうから特に注目されていきまして、高専というこの教育システムを、タイ・ベトナム・モンゴルに輸出しており、アフリカの方からも注目されているということでした。

その記事の中で、理事長の谷口先生の言葉がありまして、かなり制度的に成功しているが、これからの2、3年間で高専がさらに変わらないと、この先の60年後はないと、かなり厳しいお言葉・認識を示されたのがすごく印象に残っております。

本日のこの運営諮問会議も、私どもが気づいたこと、考えていることを率直に申し上げて、今後の高専の発展に、少しでもお役に立つことができればと思っておりますので、委員の皆様方も、ぜひ忌憚らない御意見を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

本日の運営諮問会議が、少しでも有意義なものになりますよう、皆様の御協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

(6) 議 事

(山田議長)

それでは、お手元の運営諮問会議会議要領に基づきまして、本日の議事を進めさせていただきます。

この会議の職務は、運営諮問会議規則によりまして、宇部高専の教育研究活動や運営に関する重要事項を審議し、校長に対して助言を行うということとなっております。各委員におかれましては、宇部高専に対しての助言、御意見等を御自由にお聞かせ願いたいと思います。

本会議の進行形式といたしましては、初めに宇部高専側から議題について御説明いただきまして、その後、意見交換をお願いしたいと思います。

それでは、早速議事に入りたいと存じます。

まず、本日の議題1、「宇部高専の教育活動等に関する総合評価」について、機関評価室長の城戸先生から御説明をよろしくお願いいたします。

(城戸機関評価室長)

お手元の資料の1-1と1-2を御覧ください。

1-1が概要となっております。各項目については、資料1-2で評価しております。

令和3年度の運営諮問会議において、委員の皆様方から頂いた意見について、今年度どう反映したかということと、令和4年度の自己点検評価の現時点での中間評価について説明させていただきます。

まず、令和3年度の運営諮問会議で頂いたものとしまして、1つ目が、いじめ対策に関する点検項目が昨年度までの自己点検評価のほうに入っていなかったの、設定した方がよいという御意見を頂きましたので、今年度から資料1-2の基準3の最後の項目、基準3の40と41、7ページ目にいじめ防止対策のための体制が整備されているかという項目と、いじめ防止対策の組織が有効に機能しているかという項目を入れさせていただきました。今年度点検した結果等もそこに載っております。



2つ目に関しましては、各種アンケートを実施しておりますが、それが、学生がどのような教育を求めるか、正確に把握しているのか、そしてそれを踏まえて教育内容などの再検討にフィードバックをしなければいけないのではないかという御意見を頂きました。今年度は、5年に一度の企業・卒業生・修了生・在校生向けのアンケートを実施する年でしたので、項目内容を教育内容へのフィードバックが容易になるような項目に見直し、企業・卒業生・修了生には今年度8月から、在校生に関しては10月11月にアンケートを実施いたしました。

実施結果ですが、企業と卒業生、修了生の回答からは、平成30年度から実施していますカリキュラム、ちょうど今年度最初の卒業生が出るカリキュラムになりますけども、そのカリキュラムが企業もしくは卒業生、修了生が自分に必要と感じている教育のニーズに合っているということが概ね確認できました。

在校生に対するアンケートで、こちらら教育内容については概ね満足であるのが分かりましたが、学習環境について、ホームルームや研究室・設備等への不満が一部あるというのは確認できました。今後、施設等の意見があったということを担当にお伝えして、その反映を検討していく流れになり、そこで教育内容とともにフィードバックできればと考えています。

それを踏まえて、今年度、自己点検評価項目等も見直し、10月から11月の中間に、各部署に自己点検を実施していただいて、それらを取りまとめて機関評価室で実施済みであるものはA：良好である、今年度中まだ実施はしていないが、もう実施する予定、何もなければAになるだろうというのはB：概ね良好である、不十分であるものはC：不十分である、としています。今年度は現在、中間ではCはありません。今年度該当がないものは評価なしとし、これは入試の基準6のところまで1件あります。

また、昨年度まではS評価が1件しかありませんでしたが、各部署で今年、力を入れているところは特筆すべき点として自己評価していただいて、機関評価室で評価できる、優れていると判断したところが10項目ありましたので、説明させていただきたいと思います。

基準1から10まであり、資料1-1には概要が載せてあります。2ページ目から、概ね良好であると判断できるというのはAもしくはB評価、C評価がない場合は概ね良好である。基本的に、年度末になればこれは全てAになるので、良好であるということになるということです。

なお、全てA以上、AとSだけのものは良好であると1行目に書いてあります。

基準1につきまして、資料1-2をご覧ください。AとB、Bに関してはまだ実施中もしくは年度末に実施する予定のものなので、問題なければAに変わりますので、機関評価室で概ね良好であると判断しました。

昨年度の自己点検評価につきましては、ホームページに昨年の6月に公表しております。

次の組織及び教育支援者等の基準につきましても、これもAとB評価になっていますので、概ね良好であると判断いたしました。ここには、先ほど申した特筆すべき点として、S評価というのが2項目あります。2-8、3ページ目、教育方法に関するFDが実施されているかと、2-9、FDが教育の改善に結びついているかという項目です。今年度は特に5月と10月に教務部で教育に関するFDが行われまして、それに多数の教員が参加し、来年度以降の教育の改善につながるだろうと評価し、S評価と

しております。

続きまして、基準3の学習環境及び学生支援等につきましても、概ね良好であると判断しております。ここは、先ほど新たにいじめ防止対策についての点検項目を追加していて、いじめ対策委員会は現在も何回か開催されており、今後も開催する予定ですので、A評価とB評価という評価はつけておりません。

S評価に関しましては、ここでは4項目、基準3—3、実習工場は適切に整備されているかという項目で、万全の整備状況であるということで、S評価として判断いたしました。

項目3—20、障害のある学生に対する教育上のガイダンス実施をしているかというのは、かなり手厚いです。まず、入学した障害のある学生に対するガイダンスもありますが、入学前の希望者に対する授業見学にも対応していますので、S評価となっております。

項目3—26、キャリア支援室は有効に機能しているかというのも、件数も出ています。10月までですけれども、キャリアに関する相談の件数が114件。他には、Uターン支援、西部石油の閉鎖、機能停止に伴う再就職支援、これについても数件支援しているという結果が出ていますのでS評価、優れていると判断いたしました。

また、寮より、コロナの流行でしばらく停止していた勉強会を11月第3学期から再開し、今後も複数回実施する予定ということでした。寮自体が生活の場ですけれども、勉強もする場であり、こういった勉強会を実施するというのは優れた点と判断できましたので、S評価とさせていただきます。

基準3は、この4つの点をS評価とし、優れていると判断いたしました。

基準4、財務基盤及び管理運営につきましても、A評価とB評価、全てB評価以上になっておりますので、概ね良好であると判断いたしました。

ここもS評価が2件ありまして、9ページ目、危機管理体制は有効に機能しているかという項目で、コロナウイルス感染拡大防止で適宜リスク管理室会議が開催されております。現在も学校に来ることができないクラスも幾つかありますけれども、そういった管理を、連絡できる取組がなされています。

また、1・2時限目に学生が登校しているか確認する、そういう取組を10月、第3学期から実施をしているところです。

学生の不在等に対するインシデントの早期発見、そういった体制が整備されているのでS評価、優れていると判断いたしました。

項目4—22、SDが適切に実施されているかという項目も、複数の様々なSDが実施されており、また機構もしくは学内のほか、山口大学主催などの外部の研修会にも複数人参加させているので、ここは優れていると評価いたしました。なので、基準4はこの2点をS評価しております。

基準5につきまして、準学士課程、本科1年生から5年生の教育課程と教育方法ということになります。ここもB評価以上になっておりますので、概ね良好であると判断いたしました。

ここに関しては、昨年度の実施計画だとAでしたが、昨年の結果を機関評価室で評価した際に、不足しているのではないかとこのところが3つありました。それが作成したシラバスの総合チェック、その科目が受け持つ内容としてこのレベルで十分なのかというのがチェックなされていない。また、学修単位の授業以外の学習時間が把握できていない。最後に、試験は同様の問題が出ていないかはチェックしていましたが、その試験のレベルがシラバスのレベルや学習のレベルに適切かというのをチェックしていないというところがありました。当然、個人でやられているとは思われますが、体制としてなされていなかったもので、そこをシラバスと試験のレベルのチェックに関しては、分野の近い先生方で相互チェックを依頼しております。ここは年度末に実施される場所もあるらしいですが、全体としてはそこまでに実施されますし、また、授業外の学習時間に関しましては、授業の最後に実施している授業改善アンケートで、学習時間を1週間どの項目に対してどれだけ勉強するかという調査を既に実施しておりますので、そこはAということで評価しております。5—11がシラバス、5—16が授業外の学習時間、12ページの5—21が試験のレベルのチェックに該当し、今後の予定なのでここはBになっています。そこは、重点的にこの機関評価室で依頼しているところです。

続きまして、基準6、入試に関わるところで、基本的にはアドミッション・ポリシーどおり実施されているかという基準となります。推薦は先日行われましたけれども、学力等は今後行われるのでBという

評価で出てきております。このアドミッション・ポリシーどおり実施するという予定なので、いずれA評価になるということなので、概ね良好であると判断できるということになっています。

また、6―7、入学定員に対し入学者数が大幅に不足または超過した場合というのが、今まで本校で該当がないので、ここは該当なしで横棒になっております。

基準7、準学士課程の学習・教育の成果につきまして、基本的には、このアンケートを分析して反映させるということで全てB概ね良好です。10月末、やや古いデータですが、就職率については9割を超えていて、本校の今までの成果が認められているということで、概ね良好であるという考えております。

基準8、これは専攻科で、5年生卒業後の2年間の、準学士課程の5・6・7がまとまったものがこの、専攻科での8ということになっております。

専攻課程の教育活動ということで、ここもAとB、Sもありますけども、AとB以上という評価と機関評価室で判断して、概ね良好であると判断いたしました。

ここも本科と一緒に、シラバスの総合チェック、内容のレベルのチェック、試験のレベルのチェック、学修単位科目の授業外時間の項目が本科と同様に、個人ではなされていたが、体制としてなされていないので、そこも依頼しています。

就職率、進学率に関しては既にもう100%であり、どちらも進路を決定しているということで、成果を認められていると判断いたしました。

また、専攻科から、特に優れている、力を入れた点として評価した項目がございます。平成30年からは本科は新しいカリキュラムで教育しており、今年の5年生が初めての卒業生になります。来年度、新しく専攻科に入学する学生がその新しいカリキュラムの学生になりますので、それに対応したカリキュラムを専攻科で作成しておりますので、8―2をSと評価いたしております。専攻科の教育課程は準学士課程の教育と連携し、発展した構成となっているかという点において、対応したカリキュラムを作成したということで、S評価としております。

17ページ、基準9、研究活動の状況に関しましては、全てA評価で出てきております。チェックして良好であると判断いたしました。お手元にあるニュース&レポート、そこに成果が発表されています。

基準10の地域貢献活動等の状況につきましても良好である、これも全てA、1件Sで、良好であろうと判断いたしました。これも同様に、テクノセンターのニュース&レポートに集約されて、公表されています。S評価の10―3は、地域貢献活動は十分に行われているかという項目ですが、今年度は宇部高専でU―16プロコン山口大会が実施され、また、事前講習会も実施いたしました。公開講座も3件、市民文化サロンが3件、宇部まつりへの出展や夏休みジュニア科学教室などを実施しておりますので、これは前年度より倍増しています。前年度はコロナ等ありまして参加していないものもあったかもしれないが、今年度は増加しかなり参加・開催できているので、Sで問題ないと判断して、S評価としております。

これで令和4年度宇部工業高等専門学校自己点検評価（中間）の説明は終わりになります。

(山田議長)

御説明いただきまして、ありがとうございました。

それでは、本日の議題の1番目、今御説明いただきました、宇部高専の教育活動等に関する総合評価につきまして、委員の皆様のほうから御意見、御質問等ございましたら、よろしくお願ひいたします。

(篠崎委員)

まず基準10の部分、地域貢献のところでは、宇部高専さんに宇部市のまちづくり、非常に御協力いただいておりますこと、心より御礼を申し上げます。

また、昨年は、宇部市の成長産業創出の取組、ときわ公園チャレンジにも学生さん達にも参加をいただいて、本当にありがとうございました。

学生さんの立場というような基準から4点ほど御質問させていただければと思います。基準3の3-9、ICT環境の設備は適切であるかというところでAとなっています。今、GIGAスクール構想ということで、宇部市内の小中学校、GIGAスクール、進めておりますが、どこまで進めれば適切なのかというときに、今回、この適切とされたところが、どういう点で適切なのか御説明をいただければと思いますし、今、宇部市でも子供1人1台タブレットというものを配布させていただいたりしておりますが、さらにその上に電子黒板であるとかデジタルドリルであるとか、どんどん、さらに重なってきています。どこまですれば適切というふうに判断するのか、非常に難しいところで、このように判断された基準を教えていただければと思います。



(仙波教務主事)

現在、本校ではICT環境ということで、マイクロソフト365を積極的に使用しております。その中に、Teamsというものがあります。これをもって、今、連絡あるいは授業等についてもコンテンツを配布しております。

特に、今、コロナ禍で休まざるを得ない人、そういった学生がその休みをフォローできるように、授業のビデオ撮影もしくはパワーポイントに音声吹き込むような形のコンテンツを作って配布し、学生は家庭でも見るようにしております。

残念ながら、タブレット等は1人ずつ配布、購入はできておりませんが、手元のスマートフォンでも対応できますので、そういう意味では、デジタル環境は一通りそろっており、適応できているという判断でAにしております。決して優れているところまでにはできていないのが現状です。

また、学内のLANも整備されていますので、学生は学内LANを使ってアクセスが可能になっております。

(篠崎委員)

ありがとうございます。

多分、高専さんではこういうケース、少ないとは思いますが、小中学校のほうで、今、一つ、懸念として、家庭にネット環境がない家庭や、この1年間で物価高騰等もあって所得が急変した世帯等もあると思います。その辺りに対する制度というものもできているというふうに理解してよろしいですか。

(仙波教務主事)

家庭の環境につきましては、同窓会からの支援という形で、家庭にWi-Fiルータを貸し出すことができています。

また、パソコンも1人1台とはいきませんが、学生課のほうで管理しているパソコンを必要に応じて貸し出すという支援はできております。

(篠崎委員)

本当、すばらしい制度だと思います。ありがとうございます。

続いて、3-6、バリアフリー化への配慮を行っているかというところで、配慮を継続するというところでAですが、この配慮という言葉が非常に微妙で、気にかけているだけでも配慮ですし、実際にハード整備するのも配慮だと思いますが、どの辺りまでを配慮というふうにされているのか。

(内堀副校長)

副校長の内堀です。施設的な整備に関しては、エレベーターの設置以外は概ね終了しております。スロープや車椅子に対する、入り口までのところは大丈夫ですけれども、ただ、階段に関しては、4階以上でないとエレベーターがそもそも設置できない等、基準があります。

そういうことに関しては、そういう該当の学生が入学することが決まった後に予算要求をするということになっております。

予算要求と実際に予算がつくまでのギャップに関しては、例えば1階に全て持ってくるというような配慮をするということを決めております。

そういうものも、いろいろなケースをあらかじめ全部想定して、全部準備しておくというのは無理ですので、配慮を継続するという表現になっていて、通常想定されるものに関しては概ね終了しています。

(篠崎委員)

ありがとうございます。すばらしいと思います。

続きまして、この1年間で少し大きく学生に注目された言葉で、ブラック校則というものがあります。いわゆる時代に合わなくなった校則、新年度から宇部市も取り組もうとしておるところですが、宇部高専は比較的、地元としては自由なイメージがありますけれども、ブラック校則というような課題は特にないというふうに考えてよろしいでしょうか。

(江原学生主事)

学生主事の江原です。校則については、昨年度、成人年齢が18歳になるということもありまして、それに合わせて、その前年に学生会を中心に見直しをして、文言の修正や時代に合っていない項目を削除する活動を、成人年齢が変わるのでしております。

個人的には、制服のところがジェンダーレスの問題などありまして、そこはこれから見直していきたいと思っているところです。

(篠崎委員)

ありがとうございます。学校側がそこまで把握していらっしゃるのすごいですので、引き続きやっていただければと思います。

最後は、基準2の方の、現在教員の働き方というところが非常に注目をされておるところであります。こちら、残業時間の把握等はもちろんされていらっしゃると思いますが、どのような状況で、今回、調査の基準2のほうの判断に至ったのか、また併せて、部活動の地域移行化というところは、高専さんの部活動はどのように移行するのか、その辺りも併せて教えていただければと思います。

(内堀副校長)

超過勤務に関しましては、公的に学校のほうが命じた業務に関しては、その命じた者が取りまとめて全て申請するということになっております。

それから、高等教育機関ですので、研究業務というのがあるかと思っておりますので、研究業務に関しては、超過勤務として認めておりません。各自の努力において行っております。

(江原学生主事)

部活動の地域移行ですけれども、現状としては課外活動指導員という形で、外部の方に来ていただいて、謝金もお支払いして指導していただいているというのは進めておりますが、なかなか引受手がなくて、全てのクラブにできているというわけではないというのが現状です。

地域のほうにも完全に移すというのも、可能であれば進めたいと思っておりますが、そこまで至っていないという状況です。

(篠崎委員)

ありがとうございます。何かそのようなイメージが私もあったので、高専さんって、外部のOBの方がコーチで来て御指導されて、それをひとつ、逆に教えてもらいたいなというような思いもありました。今、我々も中学校の部活動というところが、地域移行化というところで、誰が担っていくのか、民間のスポーツクラブに任せるのか、地域の方々に任せていくのか、それぞれ課題がありますので、地元の中学生等と連携できる場所は多々あると思っておりますので、また意見交換させていただければと思います。

ありがとうございました。

(山田議長)

ありがとうございました。

それでは、他の委員の皆様の方から御質問、御意見等ございましたら、よろしくお願いたします。

(三浦委員)

1つ目のいじめ対策、このいじめ対策ってなかなか見つかりにくく、難しいと思います。我々も、会社で不祥事等がある場合には、内部通報制度的に、そういう仕組みをつくって出そうとする仕組み、あるいはいろいろコミュニケーションを取ることが大事とよく言われる、心理的安全性という話がよく出てきますので、この辺りどう考えられていらっしゃるかがひとつ。また、アンケートで、施設設備の反映という点で、様々なところで働き方改革あるいは女性が働きたい職場づくりをしているので、学生さんがこの施設に対してどのような御意見があったか具体的に聞かせていただきたいと思ひます。



(江原学生主事)

学生主事の江原です。学生のいじめ対策については、まずは年1回、外部の方に来ていただいて、学生向けのいじめに対する講演会を実施しています。また、学生にいじめ対策を考えてもらうということで、本年度は学生会のメンバーに集まってもらって、意見交換もしました。

意見交換で出たものとしては、学校の対策を学生がどこまで理解しているのかというところで、例えば、どういう処分をしているかというのも、学生会のメンバーの認識が不足しているところもありましたので、その点は周知がもっと必要であると分かりました。他にはSNS等の教育も必要であると分かりました。学生にいじめに対して考えてもらうという機会を、どんどん今後も設けていきたいなと思つたところです。

(三浦委員)

ありがとうございます。いじめ委員会のメンバーに学生さんは入っていますか。

(江原学生主事)

いじめ対策委員には入っていません。

(山川校長)

補足をよろしいでしょうか。

いじめ対策で、一番重要なのは2点あって、まずどういうふうに早く発見するか。いじめって必ずやっているわけですから。初期の段階でどう見つけるかということが一つと、それは重要性にもよりますが、それからそれが分かったときに、チームとして、学校全体として取り組めるかどうかという、その2点だと思っております。

どういうふうに発見するかというのは、例えば、何か相談したいことがありますかというアンケートを結構取っています。また、SNS等で、噂になったりする情報を、どれだけ集めるかということが重要と考えています。ただ、それは網羅的に見つけるのは難ですが、例えば、本校はカウンセラー等が非常に充実しております、そういった相談の機会に非常に行きやすくしている、あるいは担任の先生が、悩みがありそうな様子の学生を発見したら相談等を勧める、あるいは修学支援室を勧める、学生相談室もありますし、幾つかの体制がありますので、連携しながらそういう学生をどのように早く発見していくかということが重要と思ひます。

それともう一つ重要なのが、このいじめ対策委員会というところです。担任の先生に任せず、全体で支える、学科で支える、相談室等で支える、そして全体の会議になるべく早く出して、それはもう厳し

く対応いたします。特にSNS上も含め、いじめについては非常に厳しく指導をしているということ、学生も保護者も十分理解してもらっていると思っていますので、そういった対応を早くすることが重要です。

また、機構本部の方針でもありますが、いじめ対策委員会も、これまでは校長がトップではありませんでした。トップを校長に格上げして取組をしています。当然、それをやっているからいじめが無くなっているわけではなく、これは永遠に続く話かなというふうに思いますけれども、最悪の事態に陥らないようにするにはどうすればいいかと、それは早く対応することだと思っています。

(三浦委員)

ありがとうございます。我々の会社でいうと、いじめではなくて、パワハラ等、ハラスメントという形で我々もなかなか悩んでいるところがありますので、参考にさせていただきます。ありがとうございます。

設備はどのようなことを学生さんは要望されたのか、参考に教えてください。

(城戸機関評価室長)

すみません、アンケートは他の担当の者が対応しております、そこまで詳細な内容は聞いていません。把握している範囲では、授業以外の学習場所としてホームルームを多く利用するので、その開放時間や空調、照明、Wi-Fi設備等で不満が出ているという結果はあったそうです。ホームルームは勉強もしますが、放課後に部活に行きホームルームで勉強しない学生もおりますので、全体のバランスをとり検討しながら、どう反映していくかというのを、詳細に今後考えていき、対応できることは反映していかないといけないと考えているところです。

(三浦委員)

分かりました。要は、勉強する環境のところの、ハード的なところをもう少ししてほしいという感じでしょうか。どうもありがとうございました。

(末永委員)

今、いじめの話とパワハラとありました。子供たちのいじめに関してのところは、項目にはなっていますが、先生方、職場としての部分もあります。学校全体の組織として健全さを保っていく上での項目として、教員内、子供内の話、また、先生と学生との間ではアカハラもございます。そういうところも含めた、ハラスメントに対する項目というのを一つ、アンケート項目で追加していただければと思います。具体的なことというのは、まずは研修を実施するというような話からなると思いますけど、一つ項目を増やしていただきたい。それは、教員の方々の環境の話も含めての意味になると思います。内容的には、いじめにも関係すると思います。

先ほど御指摘もありましたけど、それに伴って内部通報制度、窓口になるところの設置の仕方というのも考えていくことが必要かなと思います。

例えばで申し上げますと、今、私どもは、独立行政法人さん、元病院さんとか、一般的な企業さんのところへ顧問に入っていることがあります。また、顧問が窓口になると、実際に不祥事なところがあったときに利益相反になってしまうところもあるので、別で窓口になる先生方を業務委託しております。そういう通報窓口を設置するということを顧問の会社さんとかにお勧めをしています。

コストはかかりますけれども、そういう形で窓口を一つ増やすということも、先生方の環境整備も含めて考えていただけたらと思います。

なお、既に幾つか御指摘ありました、障害者に対する配慮は個別にはされているのだと思います。全



体の話でいうと、そういう社会の多様性に関する教育を意識した項目を一つ作っていただくとよいのではないのかなというふうに思います。

また、先ほど校則の話で、対応されているというのはすばらしいなと思いました。

もう一つは、やはり成人教育、また卒業に向けての教育のところ、やはりこの学生さんたちも5年で出る、20歳で社会に出るとい人が多いと思います。その後また進学される方も当然いらっしゃると思いますが、やはり卒業してからの法的な教育をぜひ具体的なカリキュラムの中に入れていただきたいなと思います。幾つかの法的なカリキュラムというところに入れていただくと、弁護士会とかは無償で学校には派遣できますので、幾つかの場面で入れていただくとよいのではないかなというふうに思います。

また、先ほど市長からありましたが、残業とは、大学と専門学校は独法化してしまってから、通常の公立大学とは変わってしまったので、非常に対応が難しくなっている、それこそ附属学校の対応の相談を受けたりするわけですが、やはりそこは気をつけて進めていただきたいなと思います。そういう意味では、先生方の体制のところに関連するところですが、学校の中でチェックをしていくところを1項目作っておられた方がよいのかなと思います。

(山田議長)

ありがとうございました。

(内堀副校長)

幾つか御説明をさせていただきたいと思います。

まず、ハラスメントに関する窓口ということですが、ハラスメント対策委員会がありまして、ハラスメント委員というのが学科ごとに設置されています。

そこが窓口になるというのが公的ですが、私のところに随時来ますので、開かれてはいる雰囲気です。ハラスメントに関して、校長のところにも行っているようですし、教務主事のところにも行っているようです。対策委員だけではなくて、そういう不満があったら、運営の側にきちんと伝えてきてくださいというのが、機能はしているのではないかと考えております。

対応に不満があれば、公的な窓口があり、トップが校長でありますので、その窓口から機能するようしております。

ただ、それができているかどうかは、点検したほうが良いと思いますので、御指摘のとおり、また対応していきたいと思います。ありがとうございます。

キャリア支援教育はもう全学生に対する教育として、1年生から5年生まで継続的に行うように科目を設置して教育しております。成人教育については、今までは20歳で卒業していましたので、成人の義務等に関しての教育はやや不足していたかと思います。

選挙がある際に対応しましたが、系統立ててできているかどうかというのは不十分なところがあるので、今後の課題とさせていただきます。

多様性・男女共同参画に関しては、キャリア支援の一環として、男女共同参画や女性のライフプランという形で、男子学生も含めて今後の社会での男女の在り方というのはキャリア支援室で教えております。LGBTQ等に関しては、まだ対応できていないかと思いますので、また今後の課題とさせていただきます。いろいろ御指摘ありがとうございました。

(山田議長)

御回答ありがとうございました。

それでは、杉下委員、よろしく申し上げます。

(杉下委員)

基準7の記述について質問させていただきます。普通の高校であれば、大体進学率をメインにどこの大学に何名入ったといった記述が多いと思います。就職のメインのところは就職率が何%ですよというふうに記述されています。

宇部高専さんの資料には、就職を希望する人に対して何%が就職、進学を希望する人について何%が進学しましたよと記述されていますが、宇部高専としてさらに上のほうを目指して進学等してもらいたい

のが何%なのか、また、就職希望の学生については本当は何%であってほしいのか。就職率は高いですよ、進学率も高いですよという記述となっているので、どうしてこのような記述になっているのかなとご説明をお願いします。

(山川校長)

今の基準は、希望どおりの道に行っているかどうかというのを見ています。本校は就職率が70%程度で、残り30%が進学するわけですけども、その70%、30%という比率に何か目標があるかという御質問ですよ。

何%が一番理想的かという考えはございません。もともとは、早期に実践的な技術者を出すというのが目的で当初できておりました。

ただ、大学進学率も日本国中で上がってきており、様々な選択肢があるというのが今の高専のいいところだと思っていて、5年間で技術を手にして就職希望している学生に対して無理やり進学を進めることはしていません。

ただし、どういった選択肢があるかということをも十分学生に教えながら、学生や保護者の意見も聞きながらその進路を決めていただきます。そして、その希望どおりとなったかどうか100%になるのが目標だというふうに考えています。高専全体としても進学するための学校では決してないということは強調しており、進学することだけが目的であれば、それは進学校に行けばいいわけですし、そういう学校では決してありません。

ですから、進学率が高いことをコマーシャルするつもりは当然ありませんし、いい大学に行ったかどうかということも、特にコマーシャルする必要はないと思っています。

ただし、様々な選択肢があって、例えば、本校に来ていただいても九大に進学している人もいますよと、それから大学院生になって起業をしている人もいますし、大企業で幹部になっている人もいますよと、様々な選択肢があって、それを尊重することが目標だと思っています。就職進学の割合に目標はなく、結果的に就職7割になっているということです。

(杉下委員)

中学校の校長会の方もおられますので、きちんと内容を分かって進学することは、進学した後の生活や、勉強、モチベーション等々に影響しますので、中学校にもアピールして、その辺は入試の時点で理解してもらいたいと思います。

(山田議長)

ありがとうございます。どうぞ。

(内堀副校長)

補足よろしいですか。学生に対してどういう話をしているかということ、最終的に、職種で進路を決めなさいというふうな教育をしています。

開発や設計のほうに進みたければ、特に工学の分野で大企業であれば、大学院の前期課程が前提になります。そういう職業に就きたいのであれば、進学というものを考えなさいと、専攻科に行くなり、大学に編入して大学院、修士課程、博士前期課程が前提です。これが、この数字として出ています。いい大学に進学しなさいとか企業に行きなさいということではなく、学生がどういう職業に就きたいかということから逆算をして、大学に進学するのか就職するのかというのを決めなさいというのがキャリア教育として行っていることです。

工学ということに限るのであれば多様な進路が開かれており、大学入試の受験というプロセスなしに純粋に工学の勉強をしていって、大学まで進学するというのが一つの選択肢としてあります。本校を出ての地元就職も全国就職もあるというふうに考えていただきたいと思えます。

数値としては、校長が言うように、希望した人が何%そこに行けているかというところで測っているということです。

(杉下委員)

分かりました。

(藤井委員)

本当にたくさんの卒業生、導いていただきまして、大変ありがとうございます。

今のお話に関連して、毎年受験したいという子と直に面接して、いろいろ思いを聞いています。自分が工業についてあるいは経営について、本当に強い思いを持ってやりたいという子が高専を目指しています。普通に入試を受けるよりも編入がという話もありますので、中学校を卒業する段階で、大学に行きたいから高専に行くという生徒は、いなくはないと思いますが、多くの子は高専でこんなことを学びたいという強い思いを持って入っていきます。5年間勉強して、その中で選択肢としてさらに学びたいから大学に編入したい、いや、もう私は社会に出たいというところを選択しているように思います。卒業生の話を聞いても、そのように感じます。だから、非常に適切にやっていただいているのかなと私は思っております。ありがとうございます。

(山田議長)

ありがとうございました。

川村委員、いかがですか。

(川村委員)

関連する質問ですが、項目をいろいろ定められておると思いますが、その項目について、例えば、他の高専と同じような比較をされることはあるのでしょうかというのが第一の質問です。いかがでしょうか。

(内堀副校長)

質問項目自体は機関別評価を受けますので、その項目を基準にしています。認証評価といいます。

(川村委員)

それなら、やっぱり他校と比較してどうだというのは全くないということでしょうか。

(内堀副校長)

自己点検ですので、していません。

(川村委員)

多分、中学校の方も興味あるのでないでしょうか。宇部高専がどんな学校かというのを見るときに、自己点検をしたときはこうだけでも、例えば、ホームページ等では高専別の偏差値出ています。このようなことを比較されるということはないでしょうか。

(内堀副校長)

偏差値を気にする学校ではないというふうに私は認識しています。先ほどの質問ですけど、大学進学を目的として高専を選ぶのであれば、偏差値というのは多分きいてくると思います。そういう中学校の生徒さんは宇部高とか、普通高校に進学すればいいのではないかなと思います。本校は、高等教育機関として工学を学ぶということであるので、5年間学んでいくだけの学力検査は課しますが、偏差値は問題にしていないと思います。

だから、進学率が何%かということに関しては、校長も言うように、頓着していませんし、売りとしてどこの大学に進学しましたということは、本校は言わないということです。他の高専と比較するのであれば、どういう学科があるのかということと比較してほしいと思います。本校は、物質がある、経営があるとか、情報に関しては制御と管理、大島商船高専は情報工学科で情報を純粋にやって、徳山高専は情報電子工学科というふうに、各学校の学科に特色がありますので、そこを比較してほしいなど、高専関係者としては思います。

(川村委員)

中には東大を目指すために高専に行くという人もいるように聞きますけど、そういったことは宇部高専ではないということですね。

(内堀副校長)

ないです。

(山川校長)

東大に進学するのであれば、間違いなく宇部高校に行ったほうが良いと思います。

勉強する環境としては、本校に来ていただくとやはり7割の学生が就職しますので、受験勉強を一緒にやってくれる環境ではないということがありますので、その点からいっても、東大に入るということは目標としておりません。

(川村委員)

ありがとうございました。

もう1点よろしいでしょうか。私どもも非常に悩ましいところがあるのですが、年度計画、中期計画を我々も立てておりますが、その中でよく言われるのが、基準がどうなっているか、実際に数値統計をきちんと作るように言われておりますが、数値目標については、この中で見受けられませんが、その辺りはいかがでしょうか。



(山川校長)

確かに御指摘のとおりかもしれません。最近の評価というのが全てエビデンスで数値目標を作って、それを達成できたかどうかということで評価するという傾向がありますので、これからはそういうことはしていかないといけないとは思いますが、ただ数値で全て目標が決めるかどうかというのは難しい点もありますので、その辺りは今後の課題にさせていただきたいなと思います。

(仙波教務主事)

評価としまして今回お示ししているのは自己評価になります。これとは別に年度評価という、本校で中期計画に沿って今年というのを目指すということがあります。それについては数値目標を立てて、それを実現するという実践はさせていただいております。

(川村委員)

ありがとうございました。

ちなみに、研究評価ということで、例えば、教員の数に対して研究発表がどのぐらいとか、そういった目標は立てられているのでしょうか。

(碓テクノセンター長)

テクノセンター長の碓と申します。御質問いただきましてありがとうございます。

特に、何本の論文が必要であるとか、どのぐらいの発表をされているかということに対しては、目標は立ててはいませんが、外部資金をなるべく皆さんで取ってきましょうということで、その辺りは積極的に促すような形でテクノセンターとしては動かさせていただいております。

(川村委員)

外部資金については、我々も一生懸命お手伝いさせていただきますので、ぜひよろしくお願ひします。以上でございます。

(山田議長)

どうもありがとうございました。

活発な御質疑、ありがとうございます。まだまだあるかと思いますが、時間の関係もございますので、次の本日の議題の2、「教育改革の現状と課題について」に移りたいと思います。

校長補佐教務主事の仙波先生のほうから御説明をよろしくお願ひいたします。

(仙波教務主事)

御紹介ありがとうございました。教務主事の仙波でございます。20分ほどいただきまして、教育改革の現状と課題について御説明をさせていただきます。

手元に資料を配付させていただいているところではございますけれども、時間が限定しておりますので、少し省略しながら説明させていただきます。

最初に、今回、この話題を提供させていただきました背景について御説明をさせていただきます。

本校としては教育改革として、平成30年度に新しい教育課程を導入してきております。大きく見直

しました。この新しい教育課程では、リテラシーとコンピテンシー、ジェネリックスキルと呼ばれるこういった力を伸ばす教育への質転換というのを目指しているわけです。

この中で、学生は実問題を解決できる、グローバル化に対応できる、キャリアデザインできる、こういった学生を育てていきたいというものです。そして、今年度がちょうど5年目に当たり、この新しい教育改革の卒業生を初めて輩出することになります。

それでは、これから大きく2つに分けて教育改革の特色とどういったことをやってきたかという実践例について、そして、5年経過しておりますのでいろいろな課題が発見されております。そういった課題に対してどう教育改善を進めていくのかという、その展開について説明をさせていただきたいと思っております。

まず、前半になります。5項目、順に御紹介させていただきます。

本校ではクォーター制、4学期制を導入しています。短期集中学習による学びの定着の実現を目指しているというわけです。1学期間で期末試験を実施するということになります。さらに、この第2学期につきましては、前半と後半に分けて、前半は普通の講義をします、後半はグループアクティビティという、特別な学習をするというふうな分割をしているというのも特色になります。

2点目が、学修単位による主体的な学びの促進です。多くの学修単位、設置基準で60単位までというのが決められておりますので、そのマックス60単位を導入しています。90分15回の授業を行うことで1単位の単位を取得することができます。こちらの学修単位は、いわゆる大学の単位になります。授業時間は90分、これは1単位で換算しておりますけど、履修単位に対して授業時間が半分になります。その代わりに自学自習という形で、自ら学ぶというのが要求される単位になっております。このタイプの学修単位、これを1年生から、いわゆる高校の1年生です、高校の1年生から導入してきているということになります。

3つ目が、グループアクティビティ系の授業を展開しているという点です。先ほど2学期を半分に分けてというお話をさせていただきました。学生のジェネリックスキルを高めるために2学期の後半、集中的にグループアクティビティを導入しています。リサーチワークショップ、プロジェクト学習、地域教育と呼ばれるものです。

このグループアクティビティ系の授業を少し紹介させていただきたいと思っております。

リサーチワークショップにつきまして、これは1年生と5年生が同時に受講する授業になっております。5年生が1年生を指導する授業で、5年目の今年初めて実現しました。学習教育到達目標、全ての授業に対してこの目標が定められております。

リサーチワークショップでは特に課題解決を行うというのが目的になってきております。これは各学科、専門学科で分かれて行きます。学科が内容についてはアレンジをしております。例えば、機械工学科であれば班分けして研究室に配属となり、太陽電池、振動工学、トライボロジー、材料工学といったような課題に対して5年生と連携し、課題解決を進めるというものになっております。

2つ目が、プロジェクト学習になります。こちらは2年から4年がメインです。5年生は単位が少し足りないというような、あるいは強い関心がある学生がオプション的に参加します。学年学科の混成チームになります。様々な学科の人達、あるいは学年の人達とチームを組み、いろいろ解決をするというものです。こういった課題なのか理解をして、チームの中のメンバーと協力して自らの役割を全うしていくというのが求められるものです。

今年度は各学科、一般教科含めて35の課題を実施しました。3ページにわたって各学科の先生方が企画した課題を示させていただいております。機械工学科、電気工学科、制御情報工学科、物質工学科、経営情報学科、一般科の先生方、全学的に取り組んでいるという学習、授業になっております。



一つ紹介させていただきたいと思います。新しいスポーツとその道具を創り出そう、高専スポーツという課題、制御情報工学科の先生の企画になります。

こちらでは、ICT機器を従来のスポーツ道具と組み合わせて新しいスポーツ、高専らしいスポーツを提案して実践しようというものになっております。

例えば、こちらの左側がメッシュBと名づけられた競技になっております。メッシュと呼ばれるセンサーをドッジビーですね、今、小学生とかがよくされているかと思いますが、それに組み込んで投げ合う、パスした回数とか距離に応じて、そのセンサーで読み取った数値でスコアをつけていくという競技になっております。

こういったのを開発して、今年度についてはスポーツコミッションフェスタ2022で一般市民の方々にも体験をしていただいたようです。

今回、省略させていただきましたけれども、NHKでも少し紹介していただいたようです。こちらのURLでも確認できますので、もしよろしければ御覧いただければと思います。

このプロジェクト学習、全学的に取り組んで、力を入れています。いろいろな事前指導も最初に行っておりまして、その事前指導でこの学習を通してどういったジェネリックスキルをつけたいかというアンケート調査をしました。その結果、コミュニケーション力が断トツで学生は身につけたいスキルとなっております。学年学科の混成チームなので初めて会う、組む学生さんたちもいるという環境から、このような経験を期待しているのかなというふうに考えております。

終わった後には、学生の自己評価としてアンケート調査をしました。まず、この間そのものにスキルレベルを設定しています。赤から青に従って能力のレベルが高くなっております。レベルの低い赤色についてはやはり多くの学生が達成できたなど、身につけているなどというふうな評価をしておりますけど、レベルの高い青色、このような能力についてはまだ自信がないという学生が少なくはないようです。このプロジェクト学習、2年生からスタートしますので、徐々に伸びて欲しいと思っており、そうなるようにプロジェクト学習を展開していきたいというふうに考えております。

グループアクティビティの3つ目です。地域教育、こちらは地域の課題をグループで解決する学習になります。課題そのものを自分たちで見つけるというタイプAと、課題は与えられるタイプBがあり、この2つで取り組んでいます。

今年度はタイプAが7課題、タイプBが4課題となりました。昨年度まではAだけでしたが、試みとしてタイプBを今年度から始めました。

ココランドのホテル利用促進という課題、少し紹介させていただきます。

こちらは、山口県の大学リーグやまぐちという高等教育機関が集まって連携しようというところ、そのコーディネートによる課題になります。宇部高専の学生あるいは教職員が企画した一般向けの公開講座をココランドで実施して集客できないかというようなアイデアを、ココランドの従業員の方々と意見交換をして、いろいろな企画を計画している最中です。まだ実践はできておりませんが、来年に継続して実践していく予定になっております。また、先ほどのときわチャレンジとかもやっておりますが、時間の都合上省略させていただきます。

話を戻しまして、4つ目になります。国際交流活動の活性化になります。

本校では古くから夏や春の長期休暇に語学研修・海外研修という選択授業を開講してきております。年々参加者、増えてきています。新しい教育課程であり、導入したのは2018年です。この教育課程でも語学・海外研修、焦点を置いていますので参加者も増えてきたところですが、残念ながらコロナ禍によって現地への渡航ができなくなりました。2020年、2021年については、現地には行けないためオンラインでつないで、海外の先生あるいは学生さんたちと交流する研修プログラムを企画して実施しております。

その背景には、2019年から高専機構の事業としてグローバルエンジニア育成事業に採択をされているということがあります。この中に、海外体験プログラムの改善という枠があります。この枠組みの中でオンライン研修を企画しており、育成事業は海外だけではなくて学内でいろいろ英語を活用していく、実践の機会を増やすというのが特徴になっています。

英語の授業以外、例えば、専門科目とか、そういった多くの授業で英語を授業中に取り入れていくという試み、あるいは英単語コンテスト、英会話教室、外国人教員による英語での授業というのも実施しております。こういった活動を通して、学生のグローバルマインドの育成を推進してきております。

その結果、今年度、コロナ禍の心配が払拭はできませんでしたが、夏に現地に送る海外研修を再開することができました。人数はまだ少ないですが、オーストラリア、シンガポール、マラ等に派遣できています。38名の学生が研修に参加しています。この春にも韓国、台湾での研修に参加する予定になっています。

一方で、昨年度、国債寮が完成しております。この国際寮を基点に本校で受け入れている短期留学生との交流を図って、オンキャンパスで留学を体験できるということを実践してきております。今年、マレーシアからの短期留学生7名が来ていました。つい先日、3か月の研究活動を終えて帰国したところです。所属研究室では、学生の交流が積極的に進んだようです。

次に、特色と実践例の最後になります、キャリアデザインに向けたポートフォリオ教育の展開についてです。昔から担任指導あるいは学科の教員によって進路指導は行われてきておりますが、最近では学生一人一人の個性や特徴を十分把握した上で、学生がキャリアデザインできるように教員側からも寄り添った支援ができるようにという思いもあり、ポートフォリオの作成を進めています。

ポートフォリオというのは、学生の個々の学習のエビデンスをファイリングしていくものです。残念ながら今はアナログ、紙媒体ですけれども、将来的には電子化をしたいと思っております。こういったポートフォリオをまとめることによって、学生が自分自身を振り返って己を知る、そして次どうするということを考えていくメタ認知が大切だと考えております。

その学習成果のエビデンスとして、外部の試験になりますが、ジェネリックスキルを客観的にスコア化できるPROGと呼ばれる試験の実施を始めています。対象は1年生、3年生、4年生、それぞれ目的があってやっています。リテラシーが4つの能力、コンピテンシーが9つの能力になります。

令和元年度に入学した学生で3年のとき、4年のときに実施した結果のコンピテンシーについて比較をしてみました。青色が3年生でオレンジ色が4年生になります。4年生で、やはり1年でスコアアップしているのかなという期待がありましたが、一見したところありません。見当たりませんが、このPROGは非常に分厚い結果が届いておりますので、分析していきたいなと思っております。

各学科によって、やはり中身を見ると若干違いがあります。やはり授業が違うことが一因かと感じています。また、学生は自分自身の点数を知ることができずから、自分の強みとか弱みというのを発見することができています。

それでは、第2部後半として、現在検討中の教育改善についてこのような流れで説明をさせていただきたいと思っております。

まず1つ目が、高専モデルコアカリキュラムの改訂についてです。

国立高専、本校を含めて国立高専、55高専あります。モデルコアカリキュラムと呼ばれる教育システムを導入しています。それは、コアと呼ばれる一般科目、専門科目の知識とか能力・技術に加えて、モデルと呼ばれる人間力を高めましょうと、実践的な技術者には必要ということで導入をされています。

モデルコアカリキュラムというのは、いわゆる高校でいうところの学習指導要領に相当するものになります。2022年度に高校のほうの指導要領も新しく確か導入、改訂されたと思います。この時期合わせて、高専のモデルコアカリキュラムについても改訂作業が今進められています。

改訂のポイントとしては、やはり現状に合わせて、一般科目と専門科目の学習内容、到達目標をブラッシュアップしましょうと、また、数理・データサイエンス・AIという学習内容を強化・追加していきましょうということになります。言い換えると、今、本校も教育課程を少し見直すべき時期に来ているということになります。

数理・データサイエンス・AIについては、大学も含めて高等教育機関全てこのリテラシーレベルの教育プログラムを導入することが、文部科学省のほうで決定されております。その教育プログラムで学ぶべき内容としましては、このような5つの項目がありまして、各大学、高専で学ぶべき内容をいろいろ授業で展開するということになります。

本校でも、昨年度から授業内容を少し見直しまして、このリテラシーレベルの学習内容を充足することができるようになりました。主にジェネリックスキルと呼ばれる、学科に共通のオムニバス授業、この中にこの数理・データサイエンス・AIの内容を盛り込んでいます。

先ほどいろいろな18歳のか、いろいろお話出ましたが、租税教室とか消費者教育とか、先ほどの女子学生のライフプランとか、いろんな目的に応じて組み合わせることができるのがこのジェネリックスキルと呼ばれる授業になっております。

この授業は、4年生まででオムニバスのようにしております。データを読む、説明する、扱うということについては、その力をつけてもらいたいという思いがありまして、各学科に任せて、各学科が専門のデータを実際に使いながら授業をしているというのも特色になっています。この春に、この教育プログラムの認定申請を行う予定になっています。

2つ目が、教育課程の課題についてです。平成30年度に導入した現教育課程がちょうど5年経過しているというのは、これまでも何度か御説明させていただきました。もう振り返りをする時期になっております。去年からもいろいろな意見を聞きながら来ているところではございますけれども、保護者や教員の気づきがいろいろあります。例えば、学修単位というのを導入しようという思いはありましたが、その自学自習による学びが実現できていないのではないかなという不安の声も上がってきております。

昨年度、1学期と2学期に学生に実施したアンケート結果をご覧ください。1年生、2年生、4年生、1日当たりの授業外の学習について平均的な時間を調査しました。青色が1時間未満、オレンジ色が1から2、灰色が2から3、黄色が3時間以上です。1年生と2年生の1学期には学修単位はなく、履修単位になります。2学期には学修単位を導入していますので、2学期では学習量が増えるところですが、あまり大きな変化がなく、こちらの期待どおりではないような結果が出ています。この結果は、現状に何らかの課題があるのではないかなという裏づけにもなっていると思っております。

そこで、今年度5月にその課題について全教員でFDを行いました。先ほどSをつけさせていただいたところになります。

事前アンケートでは約78%の教員が現教育課程の運用方法を改善したほうがよいのではという結果になりました。この運用方法が何かというと、2学期を分割しているという方法で、これは特色でありましたが、逆に弊害もあるのかなという点が明らかになってきました。

そういった点について、先生たちに対面で7班に分かれてワークショップ、ディスカッションしていただきました。そのうち6班が分割を廃止したほうが良いのではないかなという意見となりました。

先ほど自己点検の結果で、アンケート結果から現在の学習教育到達目標が社会ニーズに整合しているというような報告もありました。言い換えると現在のジェネリックスキルを伸ばす教育という新しく導入した教育課程については、大きな間違いはないかなというふうに理解をしております。ただし、今、モデルコアカリキュラムの改訂の対応や、現教育課程とその運用方法に関して把握している課題の対応が必要になります。2学期の分割については、FDの結果を通じて来年度から廃止を決定しました。

廃止をすることによって、運用方法やカリキュラムを見直すということもできます。具体的には、学修単位配当科目と、学びの流れの適正化、あるいは学期、開講科目数のアンバランスの解消などになります。今、こういった課題について、令和6年度に教育課程を改善するというのを目指して、いろいろ意見交換を進めているところでございます。

御清聴ありがとうございました。

(山田議長)

御説明ありがとうございました。

それでは、委員の皆様の方から御質問、御意見等ございましたらよろしくお願いたします。篠崎委員お願いたします。

(篠崎委員)

御説明ありがとうございました。

28ページのところで、コンピテンシー9要素ということで数値が出て、学科ごとに違うというよ

うな御説明がありました。これのそもそもこういうふうに取り組む原点が、求められる能力が変わってきているというところですけども、実際に今からどんどん効果が出てくるのはこれからだと思われませんが、実際に今の5年生と、このカリキュラムの前の5年生は、主体性等の差って感じられますでしょか。数値には出てきていない、現場の意見をお伺いしたいです。

また、就職の際に求められているものが変わっているのか、実際に就職試験等でその辺り変わってきているのか。

(仙波教務主事)

就職試験というのは、就職先が変わるのか、それとも期待されているのが変わるのかということでしょうか。

(篠崎委員)

両方含めて、就職先も変わってくるか、就職先からもそういう能力をどんどん求められてきているのか、その2点も含めてお話をください。

(仙波教務主事)

求められている能力につきましては、先ほどのアンケート、城戸のほうから説明があったと思いますけれども、それを企業様のほうにどういった能力を身につけた学生が必要かというような問いを投げかけさせていただいております。それは5年前にも実際にしているところではありますが、この新教育課程で目指しているジェネリックスキルのこういった要素については、やはり企業様もこういった能力が必要であろうというふうな回答は頂いております。

実際にこの能力が5年前の卒業生と変わっているかと言われますと、なかなか5年前の学生のことを私は思い出せませんが、確実にグループ学習でいろいろコミュニケーションを取っているという意味で、チームワークがうまくできると思います。いろいろな個性はありますので、学生によって違いますけれども、伸びる学生はこの活動を通じて伸ばしているなというふうな雰囲気は何えます。

(篠崎委員)

この質問の前段階が、いわゆる進学校の高校教員の人と意見交換させていただいたときに、今、受験じゃなくて推薦で大学に入るほうが主流化しつつあると、そういう意味で県内の教育委員会も探究科というのもつくってきていますけど、一方で、現場の公立高校の先生たちはまだその探究科のほうの社会的経験がないということで、まだまだ受験を進めてしまうというような傾向があります。ここで転換していかなきゃいけないねというお話がありましたので、まさにこれは転換をされているのだろうなというふうに今日お聞きしながら思いました。実際にどういうふうにご子供たちの能力が変わってきているのか、お聞かせいただきたいと思いました。

(仙波教務主事)

個人の感想ですけど、この教育課程を通じて伸びる学生はいます。でも、逆に言うと、今、不満を訴える子もいます。どういった不満かという、「もっと勉強したい。」という、知識注入という授業ですね。やはりそちらをもっと勉強したいという学生もいます。ただ、海外に行ってみようという学生も増えてきていますし、トビタテ！留学JAPANとかで海外に出る学生も増えていきますので、全学生に対してこの教育がよかったのかという、どちらとも言えないのかなと私は思っております。

(内堀副校長)

発表というものをやる機会も格段に増えていきますので、卒業研究の指導がもう少し高度なところに行けるようになったというのがあります。物おじしなくなった学生が増えた、というふうに感じています。

以前は発表することを緊張して、その指導の前に心を解きほぐすところから始めるようなことがありましたが、今はもういきなり内容の指導を始めることができ、最初の練習で、大体発表時間内のプラスマイナス1分ぐらいに収めてきます。そういう能力は上がってきています。

主張をするとか、何が必要なのかというのを見定めて、そこに焦点を絞って時間内に配置をするという能力に関しては、私は上がってきているなというふうに感じます。1日は24時間ですので、できるようになった分だけできなくなったことはあるので、それは今、教務主事が言われたように、知識注入型教育に関しては弱くなっているというのは事実だと思います。

(篠崎委員)

ありがとうございます。

(山田議長)

ありがとうございました。

杉下委員をお願いします。

(杉下委員)

杉下です。地域の経済団体として経済のことが気になっております。私自身が10年から20年は右肩上がり、20年から30年、これが停滞からの右肩下がりを経験しているわけです。そういった前提の中でいうと、日本の経済が、1人当たりの生産性というレベルでいうと、トップレベルからもう今では30位程度まで落ちているということです。若い人たちは豊かな時代に育っていて、日本って経済力高いよね、技術力高いよねというのをずっと思っているけれども、いつの間にか低下しているというのを認識していないのではないか、そういった危機感を、私は最近もっています。



最近、リスクニングだとかって言われている中でいうと、やはり教育現場への期待や要求のレベルが随分高くなってきているのではないかと思います。高専さんのほうのカリキュラムのほうも随分変わってきていると思いますが、その中で、ジェネリックスキルを伸ばす教育、これ非常にいいことだと思っています。

私の大学時代を思い出しますと、自主学習や、グループ学習で、あるいは講座の中でグループ検討する等の、真剣な議論をした記憶はあまりありません。そういう点で、今の高専さんのこのカリキュラムにおいて、上級生と一緒に自己学習を進めるというのは、非常にいいことだと思います。変わってきていますし、僕らの大学時代のときとは大分違うなと思っています。大学のほうも変わってきていると思いますが、逆に山田先生のほうから、高専さんがこうやって結構変わってきていることに対して、大学のほうがどう変わってきているか聞きたいなと思いました。

(山田議長)

そうですね、ありがとうございます。先ほど御説明をお伺いしていて、2学期を前半と後半に分けてのグループアクティビティ系の授業ってとても重要だと思います。特に学年、学科、専門をまたいで、一つのチームを作り、ある一つの課題と一緒に取り組むというのは、実は大学でもやらなければいけないことでして、私たちのところでも実施していますが、まだまだ十分ではありません。最後のところで、2学期分割の廃止を決定されたというお話がありましたが、非常に素晴らしいリサーチワークとかですね、このプロジェクト学習というのは今後どういう形で運用されていかれるのか、その辺は何かお考えございますか。

(仙波教務主事)

これまでは限定してグループワークしかなない期間があり、逆にその間は、いわゆる講義はありませんでしたが、それを両方混ぜて、座学をする日とグループアクティビティをする日という形で、通常の1学期の中で座学とグループアクティビティを実施していくというスタイルになります。

(山田議長)

よく大学卒業生に求められる能力の中に、必ず上位に上がってくるのが、課題発見能力、課題解決能力です。そういう意味では、こういうテーマを自ら決めて、発見して、それにいろいろな学年の垣根を越えて、学科の垣根を越えたチームが取り組むというのは、非常に素晴らしいお考えだなと思いました。ぜひこれは継続されるべきだと思うし、大学としても、こういうことが学部の垣根を越えたような形でできないか実際にも議論があり、一部では、例えば工学部と国際総合学部が、そういうプロジェクト、

PBLに取り組むということも実施していますので、我々も非常に参考になりました。ありがとうございます。

ほかの委員の皆様、いかがでしょうか。どうぞ、お願いいたします。

(三浦委員)

三浦です。学生のアンケート調査ですが、1位のコミュニケーション能力、他の項目に対して、桁が違いますよね。我々一番やっぱり悩んでいるのが、3、4年で辞めていく方がたくさんいまして、それはどこもどうも同じらしいです。そういう中で、このような教育をされてきているということなので、受入側もきちんと考えながら、どちらかという個性を大事にしていくことを意識しないといけない。

今、我々も海外にシフトしていて、弊社でいえば、地球環境問題等取り扱っており、カーボンニュートラル等は、我々化学会社としたら絶対にやっていかなきゃいけない項目です。そういう中ではいろいろなプロジェクトを若手が取り組んでいますけど、そういう下地が必要かなということがあります。また、今はインターネットで知識は得ることができるが、その知識を知恵に変えて、どういう形で事業に直結させ、事業の製品を作るのかということを考えると、この取組は素晴らしいと思いました。我々もそういうことを考えて、社内でもこういう話をしなきゃいけないということを感じまして、感心いたしました。

また、教育改革と自己点検評価を何かリンクさせていくと、多分この改革はもっとスピードよくなるかと思います。この2つを連携させていったらいいのかなというのを感じたところです。

以上でございます。

(山田議長)

ありがとうございました。

(藤井委員)

いいですか。本当に素晴らしい説明、ありがとうございました。

私も、本当に感想にしかありませんが、我々、公立の学校は学習指導要領というのがあります、それに従って物事を進めていますけれど、その中でも、やはり今求められている力というのは、1足す1は2というふうな、答えが決まったことではなくて、最善解や最適解を多様な他者との共同の中で紡ぎ出していく力、これが本当に求められていることを言われていまして、本当に我々中学校も大きく変わろうとしています。

特に宇部市の中学校におきましては、市長さんがいつも共創ということを言われているのを受けて、本当に地域の皆さんと一緒にコミュニティスクールの仕組みを生かしながら、子供たちが自分で改善を図っていくというふうな取組を様々なところで進めているところです。そういった子供たちがこれからまた高専のほうに参りますので、ぜひそういった流れをこちらにつないでいただいて、いわゆるコンピテンシー云々であるとか、伸ばしていただいたら、日本を背負っていくような子供たちになってくれるのではないかというふうに考えました。

大変素晴らしい説明、ありがとうございました。

(山田議長)

御意見ありがとうございました。

ほかの委員の皆様、いかがでしょうか。よろしく申し上げます。

(末永委員)

すみません、1点だけ。今日資料も見せていただいて、60周年の記念式典に参加させていただいて思いましたが、先生方や御父兄たち、ものすごく熱いですよね。熱い思いで、自分のお子さんたちをま



た学校に入れようというふうな、ホットなローテーションがあるというのを知りまして、ここまで熱いかとびっくりとしましたし、感心もしました。このパンフレットや、学校紹介の中に、ワンフレーズでもいいので、その熱いところを1項目入れてはどうかと思いましたので、お願いしたいと思います。

(山田議長)

ありがとうございました。

ほかの委員の皆様、よろしいでしょうか。どうぞ。

(内堀副校長)

何度も教務主事が言っているように、今のカリキュラムの卒業生が今年出る状態になります。うまくいったかどうかというのは、これから評価されるというふうに考えています。委員の皆様方には、本校の卒業生等に接する機会がありましたら、この学生はどうか、本校を卒業した学生はどうかというのを、評価していただきたいなというふうに思っております。

また、コンピテンシーといったものを本当に育て上げていこうとすると、やはり一生かかるものではないかなと思います。工学の分野に関しては、やはり修士課程というのがどうしても必要になってくるのではないかなと思います。うちのコンピテンシー教育と大学のコンピテンシー教育は多分、質レベルで本当は違うのではないかなというふうに考えていて、ただ、その基礎的な部分をこちらのほうで育て、社会に出せるだけのものにしたいというふうに考えています。実際どうなるかというのは、これから本当に評価がされるべきものだと思いますので、今後とも御意見のほう、よろしく願います。

(山田議長)

いろいろな御意見を頂きまして、ありがとうございました。

以上をもちまして本日の議事を終了させていただきたいと思います。皆様、御協力ありがとうございました。

(7) 校長謝辞

どうも本日は長時間にわたりまして、ありがとうございました。

閉会の挨拶の前に、1点、御説明するのを忘れていた内容でございますので、私のほうからさせていただきますしたいと思います。

今日の審議事項の最初にございました自己点検評価ですけれども、中間報告という形で毎年やらせていただいております。

そのために、まだ3月に来ておりませんので、3月末にはAになるものも、今のところは最後になっていないのでB評価としているという説明を先ほどからさせていただいていると思います。それは、昨年も一昨年もそういう形でさせていただきまして、ほとんどがBになっております。

実際は、まだ3か月あるわけですが、最後にならないと完全に分からないものについてはB評価というのは仕方ないと思います。私の意見でございますけれども、ある程度予測がついて、このまま進めればAになるものは、その3月時点での予測、予定ということを含めて、今の時点で御審議をいただいて、特に御意見がなければそのままの形で、4月に公表する結果になるという形に変えたほうが、健全なのかと思っております。要するに、予測として出させていただくということにさせていただきたいと思っております。

それでは、閉会の謝辞ということで、本日最初の自己点検評価のところから、それぞれの立場から御意見頂きまして、本校としても、評価のところでもう少し具体的に目標を決めて取り組んでいかないといけないということを感じました。



それと、先ほど三浦様からも御指摘いただきましたように、今まきに行っております教育改革、来年度の第5期に向けての中身の見直しというのは、まきはこの点検のところに反映すべきものですので、そういったことを意識しながら、その点検項目を踏まえてどうやっていくかということも含めて、この1年間検討をしていきたいと思っております。

本校はまきに、末永委員からもおっしゃっていただきましたけれども、地域のOBの方に支えられている学校でございます。そして市のほうとも様々な連携を、それから山口大学さんとも非常に連携をさせていただいております。中学校の先生方には大変お世話になっております。地元の企業の方にも非常にお世話になっております。

60周年のときにも申し上げましたけれども、地域に支えられて、地域の要望によってできた学校でございますので、当然、我々は地域とともに発展していかないとはいけません。そのためには地域も元気になっていただかないといけません。そういうことも含めて地域の活動にも積極的に参加させていただいて、ここにお集まりの皆さんで盛り立てていただきたいと思っておりますし、我々もできる限りのことをやらせていただきたいと思っておりますので、今後ともぜひよろしくお願い申し上げます。本日はありがとうございました。